

多文化交流実習を通じて見えてきたもの

文教育学部人間社会科学科2年

佐久間 志帆

1.参加の動機・目的

今回の多文化間交流実習を申し込むにあたって、まず他国の学生との交流に興味があったことが参加の動機の一つであった。普段とは違う環境の中で、他の国々の学生の方と一緒に授業に参加したり交流することで、刺激を受けたり自分の価値観を再考したりなど自分にプラスになることが多いのではないかと、魅力を感じた。

また、お茶大では経済関係の授業が少ないことから、午前中の開講科目の **International Marketing**、**Political Economy and East Asia** どちらにも魅力を感じた。特に、私自身がマーケティングに興味があったこともあり、最初の募集の際に **International Marketing** という科目名を目にした時強く惹かれたのを覚えている。

韓国で学ぶこと自体についても意義を感じた。英語が主流になっている今の時代において、現地の英語を学ぶため欧米や英語圏の国に留学をする日本人は多く、またそうした機会も多く与えられていると思う。しかし、それに比べると同じ東アジアの国で何かを学ぶという機会は、留学先の選択肢として与えられていても英語圏への留学の方がメインとなってしまうがちなこともあり、少ないように思う。実際、私自身も今回の多文化間交流実習の募集を目にするまでは、同じ東アジアの国についてもっとよく知っておくべきではないかという気持ちを持ちながらも、そうした国々ではなく英語圏への留学の計画を立てていた。今回の実習のように、他の東アジアの国に3週間もの比較的長い期間滞在する機会はめったにない機会ではないかと思った。しかも、韓国は身近な国でありながら歴史的には深い溝のあることを考えると、非常に意味のある滞在になるのではないかと感じた。

以上、そうしたことから、私は今回の多文化間交流実習に参加することを決めました。

2.成果

2.1 多文化交流実習 I (International Marketing)

授業は、まず **International** なレベルでの **Marketing** を考えるにあたって重要な理論を確認して上で、**case study** で具体的な会社・企業の戦略を見ていき、それを踏まえてテーブルごとにディスカッションを行い発表するというのが毎回の基本的な流れであった。セミナーの終盤には、5～6人でグループを作りある国の **International business** についてのプレゼンテーションを行った(私のグループはインドを担当した)。

この授業で面白かったのが、私たちに身近な会社・企業の名前を具体的に挙げた上で **case study** が行われたことである。Nintendo、ZARA、Gap、Reebok など、どれもよく知られている名前だけでも、私は今回の授業を受けるまでこれらの企業が **International** な企業であること、どんな戦略をとっているのか、何を競争力に同業者と張り合っているのか、年間の収益はどれほどのものか、上がっているのか下がっているのか、など知りもしなかった。普段私たちはこうした企業と消費者として、買い物やCM見るこ

とを通じて関わっている。しかし、これが企業からの視点に切り替わるとこれらは全く違って見えてくる。経済・経営という分野は理論的で抽象的なものというイメージを抱きやすいものだが、**case study** では具体的で身近な例が挙げられていてとても興味深かった。

2.2 多文化交流実習 II (Korean Language - level 1)

最初、韓国に到着した私を困惑させたのは、意味の分からないハングルの嵐であった。もちろん、その時の私にとってハングルは習ったことのない言語であったのだから、日本語・英語(あと、大学で第二外国語として勉強しているフランス語)以外の言語であるハングルの理解できないのも当然である。しかし、中国語であれば漢字の知識でなんとなく意味は予測できるし、ドイツ語であっても意味は理解できないにしろ、英語のアルファベットに似ているためある程度親近感を持つ。それに比べて、最初のハングルへの抵抗感はとても大きかった。なぜなら、言っている意味が理解できないのはもちろん、その文字が一体どんな音であるのかすら全く見当もつかなかったからだ。しかし、そんな私でも韓国語の授業最初の2～3日を受けただけでハングルの読めることとなった。始めに抱く抵抗感とは裏腹に、ハングルは思いの外単純だということに気付かされた。まず、ハングルの成り立ちと音を覚えてしまえば簡単に読めるようになるし、また文や表現の構造もほとんど日本語と一緒になのである。例えば、英語では”There is A.” と「(~がある)+(Aが)」という構造だが、韓国語では”A 있어요(~がある)”というように「(Aが)+(ある)」と日本語と一緒にである。

Korean Language 1 の授業では、ハングルのアルファベットの他に、簡単なあいさつ表現、買い物やレストランでの注文といった特定場面での会話表現を習った。このクラスでなによりも良かったことは、クラスメイトの立場がみな同じで入れたことであった。午前のクラスでは、経済・経営の知識や英語力の有無が授業でいかに発言できるかに大きく関わっていた。しかし、午後のこのクラスは韓国語学習経験のない人々から構成される level 1 のクラスであったことから、みなそうした国籍や専攻に関係なく一からのスタートであった。そのため、私たちは韓国語を学ぶことを共通基盤にすることで、よりフェアにより楽しみながら学べたように思う。英語はうまく話せないけれど、経済の知識はないけれど、韓国語を一言言うだけで他国出身のクラスメイトとコミュニケーションを取れるというのは、とてもうれしいものだった。

2.3 ショートビジットで学んだこと

2.3.1 National Holiday

今回の実習でとても意味があったと感じるのが、実習期間に **National Holiday** が含まれていたことであった。恥ずかしいことに私は最初 **National Holiday** が何を指しているのか理解していなかった。むしろ「その日は祝日で授業がないから遊びに行ける！」と浮かれてさえた。気づいたのはそれが8月15日であると認識した時であった。8月15日、日本では終戦記念日、それは同時に韓国が日本から解放された日、建国記念日であったのだと気づいた時、私は少なからずショックだった。その日は結局午前のクラスで仲良くなった友達何人かと遠出することになった。電車に乗る前に、私は韓国人の友達にこんなことを言われた。「今日はなるべく日本語は話さないでほしい。今日は知ってのとおり建国記念日で、日本人をよく思っていない人、特に高齢の人々はあなたに良くないことをするかもしれない。だから今日は英語を話してほしい」と。私はこの時依然として日韓の間にある溝について感じずにはいられなかった。もちろん、私は実習先で日本のことが大好きだと言ってくれる韓国の人々と既にたくさん出会ったし、これから時間

が経つにつれて問題が薄れていくということもあるだろう。ただ、歴史は消えることはないものである以上、日本がかつて朝鮮に対して行ったことは忘れてはいけない問題なのだと思う。8月15日は実習期間の中で最も深く日韓の関係について思いをめぐらせられたと同時に、韓国人の友達と楽しい祝日を過ごせた、とても意味のある日であったと思う。

2.3.2 英語能力の違い

韓国での暮らしの中で私が常に感じていたのが、韓国人・中国人の英語能力の高さであった。主に今回のセミナーを主に構成していたのは、日本人について韓国人・中国人だったのだが、彼らと一緒に過ごしていつも感じたのが語彙力の違いであった。授業で専門的な話をする時も日常的な会話をする際も、その場面に必要な単語を詰まることなく引き出すことができる。もちろん日本人でも高い英語能力の人はいたし、英語は苦手なのだという韓国人の子もいたが、全体的に見て圧倒的にその流暢さ・語彙力の点で日本人は韓国人・中国人に劣っていたように思う。

私はこの違いは一体どこから生まれるのだろうと強く疑問に思った。またこれとは別に韓国人の友達から聞いた話ではあるのだが、彼女は高校時代に日本語、つまり彼女にとっての第二外国語を学んだということを知った。これは、基本的に第二外国語は大学に入ってから習う日本とは大きな違いである。こうしたことを考えると、日本と韓国では語学の教育システムに大きな違いがあるのではないかと感じた。英語教育の開始時期、またその教育の内容・指導方法にはどのような違いが見られるのかについて、関心が湧いた。

3.まとめ

3.1 韓国に滞在した意義

今回、韓国で3週間と少し滞在して色々な日韓の共通点や違いが見えてきたように思う。日本と韓国は、言語の構造も似ているし、姿かたちも同じアジア人ということでよく似ている。しかし、習慣や食事、人との距離感、人々の気質には大きな違いが見られたり、歴史的な溝も依然として存在しているのだなと感じた。そんな類似点・相違点も含め私は韓国のことが大好きになった。これからも何らかの形で繋がってほしいと思う。ハングルの勉強をしたり、韓国のドラマや歌を聞いてその意味を考えてみたり、また韓国人の友達と連絡を取り合ったりして、今回せっかくできた繋がりを失わないように大切にしていきたいと思う。

3.2 留学の意義

今回の実習で滞在した3週間という期間は、当然のことながら韓国のすべてを知るには短すぎる時間であったと言える。しかし、少しの間にしろ私がある程度の生活のリズムをもってそこで暮らしていたこともまた事実である。そこには、単なる旅行や1週間弱の短期滞在からは見えてこなかったものがあると強く感じている。また、どこか別の国にも何週間かの滞在をしてみたいと思う。そしてその国の人にはどんな価値観を持っていて、日本とどういった共通性があり、またどういった違いがあるのか見ていきたい。今回の実習は改めて私の留学に対する気持ちを再認識させ、またその目的をより明確なものにしてくれた。